

## 帰還と疲労の計測

22時15分。

壁に掛けられたデジタル時計のコロンが、無機質な明滅を繰り返している。

僕の住むマンションの高層階は、外界の喧騒から完全に遮断された真空のような静寂に包まれている。空調の低い駆動音だけが、完璧に管理された室温を維持するために鳴り続けていた。

予定時刻より45分の遅延。

想定される遅延要因は二つ。

一つは、弟の通うショートステイ先でのパニック発作による緊急呼び出し。もう一つは、気圧低下に伴う母親のリウマチ症状悪化、それに伴う排泄介助の長時間化。

おそらく、その両方だ。今日の気圧配置と月齢から計算すれば、弟の情緒不安定は予測範囲内にある。

電子錠が駆動し、重厚な金属音が静寂を切り裂いた。

ドアが開く。

廊下の冷たい空気が、暖房で調整された室内へと流れ込み、気流が乱れる。その風に乗って、微かな、しかし決定的な「異物」が僕の領域に侵入するのを鼻腔が捉えた。

「ただいま……。遅くなってごめんなさい、たーくん」

声のトーン、周波数、抑揚。

すべてが完璧に制御されている。

「待たせて悪い」という謝罪と、「私は大丈夫」という強がりが、コンマ数秒の間にブレンドされ、聞き心地の良い和音として出力されている。

さすがだ。彼女のこういう健気さは、芸術の域に達している。

だが、僕の目は誤魔化せない。

＊＊観測： 左肩僧帽筋に過度な緊張。歩行時、右足踵への荷重が2ミリ浅い。頸椎C5番付近に、無意識の庇い動作あり＊＊

靴を揃えるために屈む動作。その一瞬の遅延。

脊柱起立筋が悲鳴を上げている証拠だ。

60キロを超える成人男性である弟が暴れるのを抑え込み、その後、関節が固まって動けない母親を抱え上げた物理的負荷が、彼女の華奢な骨格をきしませている。

その小さな体のどこに、そんな出力が残っているというのか。

彼女が顔を上げ、廊下のダウンライトの下で僕に向けて微笑む。

照明の加減ではない。目の下のクマをコンシーラーで厚く塗り隠しているが、眼輪筋の痙攣までは隠せていない。

口角の挙上が、普段よりわずかに鈍い。

限界だ。生物として、活動限界を超えている。

「おかえり、英里。大変だったね」

僕はスリッパを差し出しながら、彼女との距離をゼロにする。

抱きしめるのではない。

検分するために、間合いを詰めるのだ。

ふわりと鼻をかすめる匂い。

彼女が玄関前で急いで振り撒いたであろう、安っぽいフローラル系のヘアミスト。その人工的な甘さの奥底に、本質が潜んでいる。

僕は獲物の内臓を嗅ぎ分ける捕食者のように、嗅覚の感度を最大まで引き上げる。

＊＊成分分析： メントール系湿布薬の残香。特定の柔軟剤（弟の固執対象）。および、微量のアンモニア臭＊＊

一般の男なら、眉をひそめるかもしれない。

所帯じみた生活感。逃れられない疲労。重たい介護の現実。

恋人との甘い時間に持ち込むべきではない「汚れ」だと、彼女自身も恥じている匂いだ。

だが、僕の脳髄は、その匂いを感知した瞬間に熱く沸騰する。

＊＊思考： 聖痕の確認。限界までの奉仕行動による汚染。……極めて美しい＊＊

彼女は今日一日、自分の人生を捨てて、他人のために肉体をすり減らしたのだ。

自分の若さも、時間も、美貌も、すべてを「家族」というブラックホールに投げ込み、その返り血としてこの匂いを纏っている。

そのボロボロの体臭こそが、彼女が「良き姉」「良き娘」であろうとした証明であり、僕だけが知る彼女の本当の匂いだ。

清潔で高潔な彼女が、排泄物や他人の唾液、汚物にまみれて必死に呼吸している事実。

そのギャップが、僕の嗜虐心と庇護欲を同時に暴発させる。

彼女はまだ、自分が限界を超えていることに気づいていない。

父のように逃げ出すことを恐れ、「私がやらなければ」という呪いで笑顔という仮面を皮膚に癒着させている。

可哀想な英里。

君のその強さは、美德ではなく自傷行為だ。

だから、僕が教えてあげなければならない。

君はもう、立っていることさえ許されないほど壊れているのだと。

## 仮面を剥ぐ準備

リビングの照度を、彼女の瞳孔への刺激が少ないレベルまで落としておく。

柔らかな間接照明の中に、彼女の華奢なシルエットが浮かび上がる。

彼女の手には、使い古した通勤バッグの他に、コンビニの薄い白いレジ袋が握られていた。

カサカサと鳴る安っぽい音が、この部屋の整った静寂には不釣り合いだ。

半透明の袋越しに見える中身を、瞬時にスキャンする。

弟がパニック時に要求する特定銘柄のカップアイスクリーム。それと、ドラッグストアより数十円高いが、背に腹は代えられず買ったであろう母用の湿布薬。

それだけだ。

自分への労いなど、欠片も入っていない。

＊＊推測： レジ横のスイーツに視線を向け、300円の出費を0.5秒で却下した痕跡あり＊＊

彼女の視線が、一瞬だけ泳いだのを僕は見逃さなかった。

おそらくコンビニのレジ前で、自分のために甘いものを買おうか迷ったのだ。

だが、その数百円があれば弟のアイスがもう一つ買える。湿布代の足しになる。

そうやって、自分を切り捨てる計算式が脳内で自動実行されたのだろう。

数百円の甘味さえ、今の彼女は自分のために使うことを「罪」だと感じている。

家族のために身を削ることが常態化し、自分を喜ばせる機能が麻痺しているのだ。

その健気で歪んだ禁欲精神が、僕にはどうしようもなく愛おしい。

欲望を殺して、唇を噛んで耐えている君の、なんと清らかなことか。

安心していいよ、英里。

君が我慢したその甘さは、後で僕が、暴力的なまでの質と量で与えてあげるから。

君が「もう要らない」と泣いて懇願するまで、完璧な理屈でコーティングされた快樂を注ぎ込んであげる。

それは君がコンビニで我慢したような、安っぽい砂糖の味じゃない。もっと脳を直接溶かすような、極上の毒だ。

彼女は自分のバッグとレジ袋をソファに置こうとして、手首を微かに震わせた。

正中神経への圧迫による痺れ。握力の低下。指先が白く虚血している。

「コート、預かるよ」

僕は音もなく彼女の背後に回り、その薄い肩に手を置く。

瞬間、彼女の体が反射的にビクリと強張る。

僕に対する恐怖ではない。

誰かに触れられることへの警戒と、「自分でやらなければならない」という強迫観念による条件反射だ。

「あ、いいの。自分でやるから……。たーくんにそんなことさせられない」

彼女の手が、慌ててコートのボタンへ伸びる。

リウマチの母親は、指が動かない。だから彼女は家で、すべての着脱を自分で行い、さらに母の着替えまで行っているはずだ。

他人に「やってもらおう」ことに慣れていない。

誰かに委ねるという回路が、長年のヤングケアラー生活で焼き切れている。

彼女の指先は荒れ、ささくれ立っている。

冬の乾燥と、頻繁な水仕事、そして強い洗剤による化学的なダメージ。

美しい指だ。どんなに高価な宝石よりも、この傷だらけの指は僕を興奮させる。

僕はその小さく、冷え切った手を、自分の両手でそっと包み込む。

力でねじ伏せるのではない。

深く、広く、覆い隠すように。

僕の体温を彼女の冷え切った末端へ流し込むように、ゆっくりと、時間をかけて圧をかける。

「制止」ではなく「鎮静」。

「……ッ」

彼女の喉が小さく鳴る。

温かさに驚いたのか、それとも拘束されたことに戸惑っているのか。

強張っていた指の力が、僕の掌の中で溶けていくのを感じる。

氷が温水の中で形を保てなくなるように、彼女の「規律」が物理的な温度によって崩されていく。

＊＊観測： 手掌の発汗。呼吸深度の浅さ。コルチゾール値の低下を確認。副交感神経優位への強制移行を開始＊＊

僕は彼女の耳元に唇を寄せ、呪文のように囁く。

鼓膜を直接震わせる、低く、甘い周波数で。

「……ほら、肩にすごく力が入ってる。石みたいに硬いよ」

親指で、凝り固まった僧帽筋を優しく押す。

彼女の口から、無防備な吐息が漏れた。

「大丈夫、ただ立っているだけでいいから。君はもう今日一日、十分すぎるほど頑張った」

包み込んだ手を、ゆっくりと下ろさせる。

彼女は抵抗をやめた。糸が切れた操り人形のように、僕の手にも身を預ける。

そうだ、いい子だ。

その無力さが、今の君には一番似合っている。

「全部、僕に任せて」

僕は彼女の背中から、重たいウールのコートを剥ぎ取る。

ずしりと重い。

それは単なる衣服ではない。

彼女が社会で戦うために纏っていた、「しっかり者の長女」「完璧な社員」という名の重たい甲冑だ。

それを脱がせた瞬間、彼女の肩がガクリと落ちた。

露わになったブラウス越しの背中。

肩甲骨が、悲痛なほど浮き出ている。

栄養不足。過労。慢性的な睡眠不足。

その華奢で脆い背中を見ていると、背骨を指でなぞって一本ずつ確認し、その隙間に僕の指をめり込ませたい衝動に駆られる。

まだだ。

今はまだ、彼女を「人間」として扱わなければならない。  
獣のような食欲を、理性の檻に押し込める。  
丁寧に、慎重に、解体していくのだ。

「さあ、座って。……足、痛かったらう？」

僕は彼女を、部屋の中央に鎮座する高級ソファへと誘導する。  
彼女はまだ、僕が仕掛けた「救済」という名の底なし沼の縁に立ったばかりだ。  
その足が沈み始めていることにさえ、気づいていない。

## 完璧なケア

彼女をイタリア製のレザーソファに深く沈み込ませると、僕はその足元に膝をつく。  
跪く（ひざまずく）のではない。  
検体の状態を、最も至近距離で確認し、支配するためのポジションだ。

「足、出せるかい？」

僕が穏やかな声で問いかけると、英里は少し躊躇いながら、膝丈のスカートの裾を両手で抑え、足を差し出した。  
黒の80デニールのタイツ。

その表面は、度重なる摩擦で細かな毛玉ができ、左足の親指と、両足の踵の部分は生地が薄く透けて肌色が覗いている。  
新しいものを買う数百円の余裕さえ、弟のおやつ代や母の医療費に回している証拠だ。

僕はその薄くなった踵に指を這わせる。  
冷え切っている。まるで死体のような温度だ。  
ゆっくりとタイツを引き抜いていくと、摩擦音と共に、ナイロンの中に閉じ込められていた彼女の疲労の匂いが解放される。

＊＊観測： 足関節周囲の浮腫（＋3レベル）。母趾球および小趾球に、過度な荷重による角質硬化。  
足底筋膜に重度の炎症反応を確認＊＊

酷い状態だ。

まるで舗装されていない山道を、装備なしで行軍した兵士の足だ。

60キロの弟がパニックで暴れるのを踏ん張って支え、リウマチで動けない母をベッドから車椅子へ移乗させ、仕事中はヒールを履いてフロアを走り回った結果がこれだ。

白く細い足首には、靴擦れの痕が赤黒く変色し、瘡蓋（かさぶた）になりかけている。

絆創膏さえ貼っていない。自分の痛みを手当てする時間すら惜しんだのだ。

「……見ないで。汚いから」

英里が恥じらって、足を引っ込めようとする。

自分のボロボロで生活感に塗れた足を、僕の完璧に整えられた部屋や、手入れされた指に触れさせるのが申し訳ないと思っているのだ。

その自罰的な思考回路。

僕は逃がさないように、彼女の足首を大きな手でしっかりと掴む。

「汚くないよ。……よく頑張ったね、この足は」

嘘ではない。

僕にとって、この傷だらけの足は、美術館に飾られたどんな彫刻よりも価値がある。

彼女の献身、犠牲、苦痛。そのすべてが刻まれた、生きた履歴書だ。

僕は親指の腹を使い、カチカチに固まった足裏の湧泉（ゆうせん）というツボを、絶妙な圧で押し込む。

「んっ……あう……！」

彼女の口から、甘い苦悶の声が漏れる。

痛い。けれど、それ以上に脳が痺れるほど気持ちいいはずだ。

僕は解剖学的な知識に基づき、滞ったリンパとドロドロの静脈血を、下から上へと強制的に循環させる。

僕の手熱が、彼女の冷え切った末端に侵入し、凍りついた血管を溶かしていく。

彼女の呼吸が深くなる。

強張っていた肩の力が抜け、ソファの背もたれに体重が預けられていく。

防御態勢の解除。

ここだ。彼女の思考力が鈍ったこの瞬間こそが、楔（くさび）を打ち込む好機だ。

マッサージの手を止めず、僕はまるで明日の天気の話でもするように口を開く。

重要なのは「ついで」のトーンだ。重々しく切り出してはいけない。

「そういえば、弟くんの来月のショートステイだけど」

ビクリ、と彼女の体が跳ねる。

リラックスしかけた筋肉が再び収縮する。

「予約しなきゃいけないのに忘れていた」「また手続きで役所に行かなきゃいけない」という恐怖反射だ。

彼女にとって行政手続きは、睡眠時間を削り取る最大のストレス源だ。

「申請書類、僕の方で更新しておいたよ。受理通知もさっきメールで来ていたから、君が役所に行く必要はない」

「え……？」

英里が目を見開く。何が起きたのか理解できていない顔だ。

「前回の書類、少し書式が古くて、記入欄が非効率だっただろう？ 見ていて気になってね。自治体のウェブサイトから最新のフォーマットを落として、記入例の不備も補正して出し直しておいた。……僕の職業柄、ああいう非論理的なレイアウトを見ると直さずにはいられないんだ」

嘘だ。

君のために、夜通し自治体のサイトを解析し、最も通りやすい文言を精査して作成した。

だが、それを「君のため」と言ってはいけない。

あくまで「僕の几帳面な性格ゆえの行動」「書類の不備が許せなかっただけ」というスタンスを貫く。

「それと、お母さんの通院タクシーも。毎回君が仕事を抜けて、電話で配車するのは非効率極まりない」

僕はふくらはぎの筋肉を揉みほぐしながら、淡々と続ける。

「地元の介護タクシー会社と契約して、定期便で組んでおいたよ。毎週火曜と金曜の14時。ドライバーもベテランを指定してあるから、リウマチの介助も慣れているはずだ」

「そ、そんな……ダメだよ、たーくん。そこまでしてもらったら……」

「僕のためだよ、英里」

僕は彼女の言葉を遮り、優しく、しかし断定的に告げる。



「君が急な呼び出しで仕事を抜けたり、タクシーが捕まらなくてイライラしたりしていると、僕とのデートの予定が立てにくいんだ。君のスケジュールを安定させることは、僕の利益になる。だから、これは僕の『投資』だと思ってくれればいい」

「あ……でも、お金……。定期便なんて、すごく高いんじゃない……」

「自治体の重度障害者支援加算と、福祉タクシー券の助成枠をフル活用したから、実費は今の君のスポット利用より安くなるよ。計算書、あとでテーブルに置いておくね」

完璧なロジック。

手間が省け、時間が生まれ、さらに金銭的な負担さえ減る。

彼女に拒否する理由は、論理的に存在しない。

あるのはただ、圧倒的な「結果」としての救済だけだ。

彼女の瞳が潤み、唇が震え始める。

喉から手が出るほど欲しかった「自由な時間」と「安眠」が、突然空から降ってきたのだ。

父が逃げ出し、親戚も離れていき、誰も助けてくれなかった冷たい荒野。

そこで一人、血を流しながら戦ってきた彼女の武器を、僕が静かに取り上げた瞬間だ。

「……ありがとう。……ありがとう、たーくん……」

涙が頬を伝う。

彼女は気づいていない。

武器を捨てた兵士は、もう二度と自分の足で戦場には立てないということに。

＊＊状態： 緊張緩和（R e l a x a t i o n）。依存深度（D e p e n d e n c e）、急激な上昇を確認。心拍数、安定域へ移行＊＊

彼女はもう、僕なしでは来月のスケジュールさえ組めない。

その事実が、僕の歪んだ所有欲を深く満たしていく。

そう、君はただ、僕が敷いたレールの上を歩けばいいんだ。